



遷宮で結ぶ人の輪心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

現代結婚式事情	2
本宗奉賛委員会および神宮大麻暦頒布始祭	4
教化委員会各部会の進捗について	5
第一回神社検定(神道文化検定) 実施について	7
杜のめぐり(五)	8
庁務日誌抄	9
バスツアー「神主さんと神社へ行こう」	10

目次



第198号

発行 埼玉県神社庁
さいたま市大宮区高鼻町1-407
電話048(643)3542
編集 庁報室
印刷 株式会社アサヒコミュニケーションズ



神主さんと神社へ行こう 9月11日 川越氷川神社

現代結婚式事情

山田 禎久

天地の 神にぞ祈る 朝なぎの
海のごとくに 波たたぬ世を

神祇安寧と国の平穏とを祈る「浦安の舞」は、これから新たに家庭を築こうとする男女の結婚式に奉奏されることも多い神楽舞である。

たしかに、若い二人が今後穏やかな心持ちで日々を送り、安らぎのある家庭を営むことは、世の平安を叶えることにつながる。神前での結婚式を行なった夫婦が、社会の一員としてその平安を築いていくことを願いたいものである。

本稿では、現代の若者に「家庭」と「社会」はひと続きの存在として認識されているのか、



また、「結婚」あるいは「神前結婚式」は、彼らからどのように捉えられているのかについて、以下、平成二十二年版「ゼクシイ結婚トレンド調査（株式会社リクルート発行）」の集計値を基に、当川越氷川神社の状況も時折交えながら、現代結婚式事情の一片を紹介したい。

一、どうして結婚するのか

首都圏の男女を対象に「結婚を決めた理由」を複数回答可で尋ねたところ、「相手と一緒に将来を生きたかったから」が七十七%と最も高く、次いで「相手と一緒に生活をしたかったから」が六十二%、「精神的に安らぎが得られるから」が五十一%と続く。

他には、「子供など家族が欲しかったから」「親が喜ぶから」「経済的に安定するから」という回答がみられる。

過去の集計値と比較すると、近年「精神的に安らぎが得られるから」は増加傾向にある。

二、仲人の有無

平成二十二年、首都圏で仲人を立てた結婚式を行なった率は〇・八%。東京都では一・二%、神奈川県・千葉県では調査上は〇%、埼玉県は首都圏では最も高いが、それでも一・

七%に留まる。

「仲人を立てなかった理由」に対する回答（複数回答可）

として、「特に必要を感じなかった」が八十八%、「形式にこだわらなくなかった」が十七%。以下、「いろいろ」と面倒」「頼める人がいなかった」と続く。

生涯にわたり、二人の家庭を後見してもらう立場である仲人の存在を「不要」あるいは「形式的」と考えていることがわかる。

結婚に「精神的な安らぎ」を求める一方で、家庭外との関わりを「面倒」と捉えているようだ。家庭が社会の構成単位であるという認識よりも、内向きな安らぎを得る場所、との考え方が増えている状況がみてとれる。

三、挙式・披露宴の実施状況

「挙式・披露宴」の「どちらも行なった」が九十三%、「挙式のみ行なった」が五%、「披露宴・披露パーティーのみ行なった」が二%。信仰心の有無はともかく、ほとんどが何らかの形式で挙式を行っていることがわかる。



四、挙式形式

「キリスト教式」が六十三%、「神前式」は十八%となっている。一時期七七八%にまで下がった神前式の割合は、現在、復調傾向にあるものの、依然、キリスト教式の三分の一以下に留まっている。

五、挙式形式の選択理由

「施設全体の雰囲気良かったので」が四十五%で最も高く、次いで「その形式に憧れていたから」四十一%、「結婚式場の中に施設があったので」が三十二%と続く（複数回答可）。

他には「着たい婚礼衣装の関係で」「多く



の人に参列してもらえるので」が比較的高く、「宗教上の関係で」「思想や信条の関わりで」は二〜三%と低い。

どの挙式形式を選択するにしても、信仰心を基に挙式形式を選んでいる訳ではないことがみてとれる。

六、当社の状況

「ゼクシィ結婚トレンド調査」によると、平成二十二年度の結婚平均年齢は、男性が二十九・九歳、女性が二十八・三歳である。これに対して川越氷川神社での結婚平均年齢は男性三十三〜三十四歳、女性三十一歳となっている。「年齢的に、キリスト教式よりも神前式の方が落ち着く」と話す人が多い。

当社で結婚式を行なった夫婦を対象に、「神社での結婚式を選んだ理由」を尋ねたところ、「落ち着いた雰囲気」「厳かさ」「結婚

後も節目に参拝できる」「幼少より参拝している」が上位であった。このうち、「結婚後も節目に参拝できる」「幼少より参拝している」は特に増加傾向にある。結婚後も人生の節目、あるいは子どもの誕生や成長に合わせて何度も訪れることができるという点は、神前式の魅力の一つと言えるだろう。

七、神前結婚式の今後

さて、神前結婚式に伴う一般的な印象として、「堅苦しい」「緊張しそう」「キリスト教式に比べ、ファッショナブルでない」という意見が多く聞かれる。

前述の通り、結婚式を行なった夫婦と神社との関わりは、その当日のみで終わるわけではない。結婚式をひとつの契機として、その後、代々に



亘り人生の節目に神社を訪れることに繋がっていくとすれば、こうした神前挙式の印象に対して、神社はどのように向き合っていくべきか、ということを考える必要があるだ

ろう。

これまでの少ない経験を基に言わせていただけとすれば、西洋風結婚式の要素を取り入れる(フラワーシャワー風の設えや父親と腕を組んでの入場等)ことが神前挙式の印象を良くするとは決して考えられない。むしろ、神前挙式ならではの美しさや感動のありかたを追及していくべきと考える。

また、「堅苦しい」「緊張しそう」との印象に対しては、逆に「儀式は一定の緊張感を伴うものであり、だからこそ意味がある」ことを説明していくと、こちらの予想以上に若者は納得することが多いと感じている。

人生の中で大きな節目といえば、まず、「誕生」と「死」を挙げることが出来るだろう。しかし残念ながらこれらは自身でその時期を決めることは出来ず、またそれに伴う「喜び」や「悲しみ」も、専ら自分の周囲の人々の感情に依るものである。

それに対し「結婚」は、「誕生」や「死」に次ぐたいへん大きな節目でありながら(少なくとも現代では)、自分の意志で相手や時期を決めることが出来る。さらにこの広い世の中で、ただ一人の一生の伴侶に巡り合えたことは、目に見えぬ神のもたらした有り難い「縁」というほかにない。今日まで自分を育んで

くれた先祖や両親をはじめとする周囲に感謝を表わす場でもある。そうした大きな節目には、むしろ大いに緊張し、背筋を伸ばして臨むべきであることを、自信を持って伝えていきたい。

しかも、世界のどの国でも重要な人生儀礼は、その国の文化や歴史・伝統・宗教観に則った形式で行なうのが一般的なのであるから、日本人が迎える結婚式は、神前式がもともとふさわしい。

「楽しい」「形にとらわれない」「ファッショナブルな」出来事は、今日、巷に溢れかえっている。だからこそ、日本の国柄や伝統、精神性のこもった神社での結婚式の価値は高まっていると考えるのである。

(川越氷川神社宮司)



本宗奉賛委員会および 神宮大麻暦頒布始祭

高橋寛司

十月七日、武蔵一宮氷川神社において、埼玉県神社庁本宗奉賛委員会および神宮大麻暦頒布始祭が開催された。

本宗奉賛委員会では、先ず、現況について神社庁事務局より報告があり、併せて遷宮奉賛会支部顕彰の選定の件などが協議された。次いで、モデル支部に指定されている南埼玉支部より、これまでの取り組みと成果を恩田幸脩支部長ならびに大野光政支部総代会長から報告がなされた。また、各支部長のほか、教化委員会・神道青年会・神道婦人会・教育関係神職協議会の各会長からも取り組みについて報告がなされた。

その後、小ホールにおいて、中山庁長以下、委員会出席者の参列により、埼玉県神社庁神宮大麻暦頒布始祭が、斎主の鎌田裕輝氷川神社欄宜以下、氷川神社職員により斎行された。終了後、神宮大麻暦頒布表彰があり、優良支部、頒布優良奉仕者に表彰状が授与された。

(庁報編集委員)



教化委員会各部会の進捗について

高麗 文 康

今期のテーマは「社会への教化と氏子崇敬者への教化」である。各部会はこのテーマに則った課題を定め、鋭意取り組んでいる。

教化研修部

対社会的教化の可能性を考える研修を目的に、「教化研修会」を開催している。

昨年度は、「神社神道における社会福祉・社会貢献活動について」を主題に開催したが、本年度は、「自然体験型環境教育を知り、神社での可能性について考える」という主題で開催した。



いずれも神社神道の社会貢献にふさわしい内容であり、研修の手法も、これまでのものに囚われない実践的な研修となった。

神社実務部

神社における管理上の実務的な問題について、実務研修会及び樹木管理チェックシート作成を行ってきた。

昨年度、「神社における管理上の諸問題」不慮の事故や災害に備えて」と題する実務研修会を行った。研修では、防犯意識の啓発や事故の多数を占める境内の樹木管理について講話があった。

研修後、神社実務部では、県内四社をモデルに定め、樹木の点検管理を樹木医指導の



下、定期的に行った。これを元に、今後、各社の運営に役立てていくため活動中である。

祭儀研究部

祭りを大切にする氏子の育成を課題に活動を行っている。

具体的には、「総代研修会」における神社祭式行事作法指導のため、『神々ともに神惟の道 厳肅なお祭りの執行のために』と題したテキストを作成し、昨年八月の「総代研修会」で初めての指導を行った。

今回の経験をもとに、内容を精査し、来年度はさらに充実した指導ができるよう企画中である。なお、冊子については、県総代会のご配慮により増刷され、希望神社に追加配布されることとなった。



教化事業部

部内を四班に分け、それぞれ事業を担当している。次にその事業内容を報告する。

「未来の神棚」の制作・頒布

前期開催した「未来の神棚コンテスト」の応募作品から二つを製品化し、「いのり301」「いのり501」と命名した。

十一月現在、三十四社から「いのり301」百十六台「いのり501」七十二台の注文を受け頒布されている。また、購入した方が、祀った様子をコメントと共にお寄せくださることもあり、それらは県神社庁ホームページに掲載している。今後は、広報活動に力を入れ、一層の頒布を企図する。

また、第一回のコンテストで寄せられた二百八十一件の応募作品を多方面から集計し、第二回コンテストの実施について摸索・検討をしている。



家庭祭祀普及事業

「おふだ立てプレゼントキャンペーン」の実施とアンケートの集計を担当している。

同企画は、六年に渡って行われているが、応募ハガキは、チラシ配布数の五・一%と同種のキャンペーンと比較しても高い返信率を維持している。これは、現在の住宅事情の中

で、神札を大切に祀ろうとする崇敬者の意識の表れであろう。また、こうした現象を通じて、家庭祭祀の具体像に関心を寄せてこなかった我々の至らなさも認識すべきであろう。

「神主さんと神社へ行く」ツアー

参加者と神社を巡り、神道教化をはかるもので、一昨年に神社庁主催で実施したものを、昨年からは教化委員会の事業とした。

昨年、本年とも「日帰りコース」「一泊コース」を準備し、神社庁ホームページ、チラシ、タウン誌、プレスリリースなどで応募した。

「一泊コース」は、二年連続で三峯神社興雲閣に宿泊した。参加者は、白衣袴を身に着



け、作法指導を受けたたり、祓詞の浄書を行うなどした。

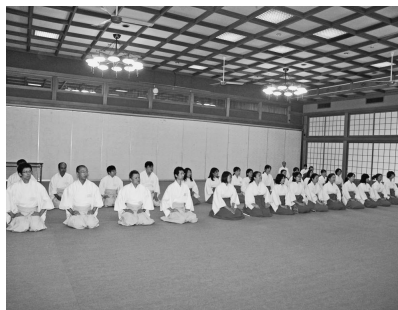
「日帰りコース」

は、昨年から、東松山市箭弓稲荷神社、行田市前玉神社、本年度は日高市高麗神社、川越市氷川神社を回った。

両コースとも、バス移動時間を利用して、部員による教化活動を試みた。

なお、いずれの神社においても宮司以下職員のご協力もあり、参加者からは、大変満足との声をいただいている。

この他、バス移動時間を利用した教化活動、教化委員会委員



の奉務神社を中心に取り組む神楽の上演なども行った。

情報部

長らく「神話啓発事業」に取り組んできたが、活動のほとんどが『神話カレンダー』の制作と配布活動であった。

今回は、これに加えて、本来の目的である神話啓発事業から発想される新たな活動を模



索することとした。具体的には、「神主さんと神社へ行こう」ツアーや、支部主催の「お宮と親子の集い」などのプログラムに、情報部員による「神話の読み聞かせ」を組み入れ、参加者に神話の世界に触れていただいた。

来年度は、公立学校にて新学習指導要領が始まることや、『古事記』編纂から一千三百年の区切りの年でもある。我々としては、こうした機会を捉えて、一般社会での神話に対する価値観を高める活動を展開しなければならぬと考えている。

ホームページ専門委員会

原則的に、これまで通りにホームページの管理運営を行うことに変わりはないが、ホームページ上での教化活動の企画制作にも取り組んでいる。成果はいずれホームページ上で発表されることとなる。

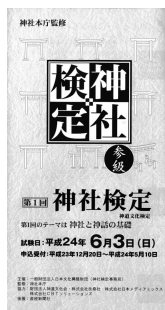
また、現在、担当者により兼務神社の一斉入力を年度内完成を目指して進めている。今後神職各位においては、各社の情報発信に神社庁ホームページをご活用いただきたい。

今後各部各課題の仕上げる時期に向かってゆく。最終年度となる平成二十四年度は式年遷宮の前年度にあたり、社会的にも改めて話題に上るであろう。こうした時機を捉え、神社界にとって、より有益な教化活動となるよう仕上げをはかりたい。

(教化委員長)

第二回神社検定(神道文化検定)実施について

この度、平成二十四年六月三日に、第一回神社検定(三級)が実施されます。



この神社検定(神道文化検定)は、神社が好きな方や、日本文化をもっと知りたい方のための検定です。

空前の神社ブームも影響してか、神社の参拝者は急増し、神社に対する社頭での質問も多く聞かれるようになりました。

そんな中、より多くの方々に神社についての正しい知識を学んでいただき、「日本のこのころ」を再発見していただくため、神社本庁監修のもと、神社検定はスタートしました。

第一回は三級のみで、受験資格に、学歴・年齢・性別・国籍等の制限はありません。

受験料は、四千八百円。くわしくは、ポスター・チラシ・パンフレットまたは、公式ホームページ「神社検定」をご覧ください。

受付締切は、平成二十四年五月十日となっておりますので、氏子や参拝者で興味のある方に、是非お勧め下さい。

お問い合わせ先は、一般財団法人日本文化興隆財団まで。〇三(五二〇九)〇五五三

杜の味めぐり
(五)

「とんかつ一幸」

春日部市中央五―八―二十四

○四八（七三六）七八三五

古利根菓撰「むら山」西口店

春日部市中央六一二

○四八（七三六）三八八〇

今回は、春日部市粕壁に鎮座している八幡神社の押田豊宮司に紹介していただきました。

最初に伺ったのは、神社から車で五分ほどの所にある、創業三十三年の「とんかつ一幸（いっこう）」です。

暖簾をくぐると、店主と女将さんの明るい掛け声が迎えてくれました。メニューには、さまざまな種類のとんかつや、カキフライ、ハンバーグなどがあります。

まず、十一月～二月までの限定、「カキフライ」を注文しました。一口食べると、程良く火の通ったプリプリの牡蠣からは旨みがあふれ出し、自然と笑顔になります。



とんかつ一幸

そしてメイ
ンは、宮司お
勧めの「大関
とんかつ定食」
をいただきます
した。すべて
の素材にこだ
わりがあり、

じつくり火を通し仕上げます。

さて、運ばれてきたとんかつを見て、その肉の厚みにびっくりです。二・五センチはあるでしょうか。とんかつは、肉の厚みが七、八ミリが限界とされ、それを超える肉に火を通し、しかも固くならずに揚げるのは至難の技だそうです。

宮司おすすめの食べ方は、一切れ目は塩をつけて素材の味を楽しみ、二切れ目は特製ソースをかけます。食べて納得です。薄い衣に包まれた柔らかい豚肉が、ご飯と抜群の相性で、揚げ物が苦手な方でもあっさりとしているのでお勧めです。

味噌汁も自家製味噌を使用しているので愛情がこもった優しい味が感じられます。また、松坂牛と豚肉の合挽で作るハンバーグ定食は売り切れ続出の一品です。

ここでは書き切れない店主が求める手作りの味へのこだわりが満載のホームページも、是非ご覧ください。

次に伺ったのは、春日部駅西口の古利根菓
撰「むら山」です。



大関とんかつ定食

豚肉は三軒の肉屋を選び、店主自らがその中から一番良い肉を一つ一つ吟味して仕入れます。

揚げ方にもこだわ
りがあり、温度の違
う二つの鍋を用意し、



古利根菓撰「むら山」西口店

が、快くお菓子の素材のこだわりや修業時代の苦労話をして下さいました。ご主人は、新潟県柏崎市の出身で十五歳の時に上京して、菓子職人

の修業をされたそうです。

おすすめは、「お葉つき銀杏」というパイ饅頭と「栗むし羊羹」です。この「お葉つき銀杏」というのは、市内満蔵寺の境内にそびえ立つ県指定天然記念物で、実の一部が葉の付け根の縁に付く、日本に五本ほどしかないという大変珍しい銀杏に因んだお菓子です。小倉餡をパイの生地で包み、銀杏と黒ゴマをあしらひ、サクサクに仕上がっています。

また、栗むし羊羹は、新栗だけで作するため、九月～三月ごろまでの季節限定です。竹皮で包まれ、中には栗のマロングラッセがゴロゴロ入っており、一口食べると、あつさりとした甘さながら、小豆と栗の良い香りが口一杯に広がります。



お菓つき銀杏

春日部へお越しの際は、是非お立ち寄りください。

(庀報編集室)



栗むし羊羹とお葉つき銀杏

10
.
27

[illegible]

バスツアー「神主さんと神社へ行こう」

恩 田 宏 典

このバスツアーは、昨年度より教化委員会
対外教化事業の一つとして「神社ファン」を
つくり、県内の神社と神道に関する体験をし
て頂くものです。

本年度は日帰りコースを九月十一日（高
麗神社・川越氷川神社）、宿泊コースを九月
十七・十八日（三峯神社）に実施しました。

ツアー告知は前回参加者と昨年同様神社庁
ホームページをはじめ、無料タウン誌への掲
載と、パンフレットを県内の各神社、名鉄観
光の店頭で配布しました。

日帰りコースは、三十六名が参加され、J
R川越駅を出発しました。車内では、乗車ス
タッフの部員により、神社に関する話や「神
職の一日」についてお話をしました。併せて、

参加者からの
質問等を受け
ました。

高麗神社で
は、高麗文庫
宮司をはじめ、
神社職員、教
化委員会のス
タッフが出迎
えました。

高麗宮司に



より境内を巡りながら説明をして頂き、参加
者は熱心に耳を傾けていました。次に、正式
参拝を行い、玉串拝札を神職代表と参加者代
表が行いました。

参拝後拝殿にて、教化事業部原班による
「未来の神棚」の説明とアンケート調査を行
いました。その
後の自由時間
には、「高麗家
住宅」の見学や境
内の散策を行
いました。

次に、昼食会
場の、「サイボク
ハム」（日高市）
に向かいました。
車中では、「食
前・食後感謝」
の説明を行い、
一緒に唱和して
頂きました。

昼食後は、川越氷川神社に向かいました。
丁度、バス到着時に結婚式が行われていたこ
とから正式参拝までの間、境内案内と厳かに
行われている結婚式を見学できました。参加
者は、「縁結びの神様」と言われている神社
の結婚式に立ち合え、感激されていました。

正式参拝では、山田禎久宮司の挨拶を頂
き、氷川会館へ移動しました。当日、氷川会
館での教化活動は、当日の境内放送と数日前





からの参拝者への案内もあり、百名を超える観覧者となりました。
まず、情報部による神話紙芝居「やまたのおろち」を行い、引き続き教化事業部鈴木班が神楽「八岐大蛇」を披露しました。

さらに、教化事業部鴨下班が、「家庭祭祀普及事



業」として、会場内の人たちにおふだ立てプレゼントのアンケート用紙に記入をお願いし、協力頂いた方には、「おふだ立て」をプレゼントしました。

宿泊コースは、二十七名が参加され、正午に西武秩父駅に集合し、三峯神社のバス二台にて移動しました。到着後、正式参拝では参加者代表に玉串拝礼を行って頂きました。

参拝後は、報徳殿にて白衣袴に着替えたのち、千島幸明三峯神社欄干に挨拶を頂き、集合写真を撮りました。その後、参加者を作法体験と装束着



装体験の二班に分け、作法体験では、神社庁祭式講師陣による指導と祭儀研究部の協力による「姿勢・手水・修祓・拝礼」の作法を体験して頂きました。参加者は、足の痺れを我慢しながらも熱心に学ばれていました。

装束着装体

験では、斎館を使用し、祭儀研究部員が説明し、各班の男女各一名に衣冠・正服を着装、その他の方には狩衣・千早を着装してもらい、拝殿を背景に、一人ずつ写真撮影を行いました。撮影後は、着けていた白衣袴をたたむところまで体験して頂きました。なお、写真は個別に集





合写真・装束
着写真・ス
ナップ写真を
CD・Rにし
て翌日差し上
げました。

食事の時に
は、「食前・
食後感謝」に
ついて説明を
行い、一同で
唱和して頂き
ました。

夕食後は、祓詞の説明と読み方の説明を
し、奉書に筆で浄書を行って頂きました。浄
書の指導は、祭儀研究部藤沼恵美子部長が担
当し、各自使用した筆を記念品として差し上
げました。このあと、夜間参拝時には、各自
が浄書した祓詞を持参し、拝殿にて一同で黙
想後、祓詞を奏上して頂きました。

たのち、報徳殿において、興雲閣の宿泊客に
も呼びかけて、教化事業部鈴木班の神楽「八
岐大蛇」を見学して頂きました。

三峯神社を出発後、昨年の参加者から、昨
年でできなかった奥社登拝ができた事や装束着
装体験・神楽観覧の喜びの声を多く頂きました。
規定上、西武秩父駅においてツアーの解
散としましたが、希望者に限り、秩父神社を
自由参拝して頂きました。

教化事業部では、今後も継続事業として、
このバスツアーを企画していく予定です。

(教化事業部班長)

